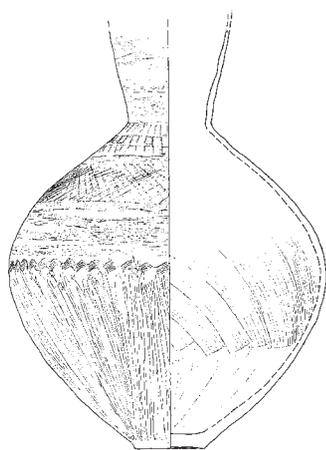


弥生土器をつくろう！③ 弥生時代中期中頃編

稲作文化^{いなさくぶんか}が定着・安定した弥生時代中期中頃（紀元前2世紀頃？）には、土器の形が各地ごとに多様化し、地域色が明確になります。また、機能ごとに多様な形がつくられるようになります。

弥生時代中期の壺には水差形^{みずさしがた}や広口形^{ひろくちがた}などバリエーション豊かとなりますが、特に液体を注ぐのに適応して発達したとみられる「細頸壺^{さいけいつぼ}」には丁寧に装飾された優品が多く、この時期に特徴的な器種となります。

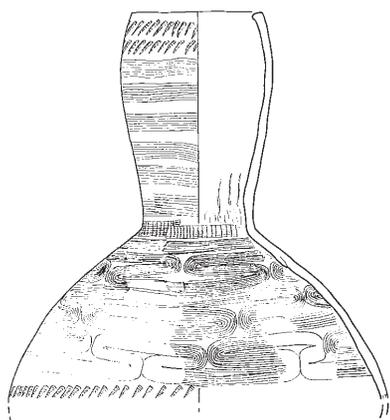
近畿地方の土器は、壺を中心に「櫛描文^{くしかきもん}」と呼ばれる細い平行線で全体が飾られるようになります。櫛描文は、細い植物の茎状^{くき}のものを束ねた工具で直線状の文様や波状の文様^{れってんじょう}、列点状の文様などを描きます。また、流れる水のような文様^{りゅうすいもん}「流水文」を丁寧に描いた土器もみられます。



- ※ペーパークラフトのデータは、
- ①格子文（37次調査出土例をイメージ）のカラープリンター用データ
 - ②格子文の茶色い紙用のモノクロデータ
 - ③流水文（19次調査出土例をイメージ）のカラープリンター用データ
 - ④流水文の茶色い紙用モノクロデータの計4種があります。

モノクロデータは、茶色い封筒などをA4サイズに切ってモノクロ設定で印刷してください。

唐古・鍵遺跡第37次調査 井戸（SK-2130）下層から出土した土器



櫛状工具による文様例

-  はじょうもん
波状文
-  せんじょうもん
扇状文
-  ちよくせんもん
直線文
-  れんじょうもん
簾状文

唐古・鍵遺跡第19次調査

大溝（SD-204）下層から出土した土器

左の図・写真は、流水文で飾られた壺です。胴部下半は失われていますが、胴部上半には3列を1単位とする流水文が3段にわたって施されています。